

平戸藩主と松浦鎮信の茶道

The Feudal Lord of Hirado and
the Art of the Tea Ceremony Founded by Matsuura Chinshin

安 部 直 樹

Naoki ABE

要旨

平戸藩主、第29世松浦鎮信は、片桐石州、藤林宗源らに茶道の影響を受け、石州流鎮信派を興した。大名が茶道宗家となり、現代にまで受け継がれている茶道流派は、稀である。

本文は、平戸藩の歴史を述べながら、松浦鎮信の人物像をたどり、鎮信流の理念に言及する。

キーワード

茶道、鎮信流、歴史と理念、

はじめに

寛永年代を生きた片桐石州は、大和小泉1万6000石の藩主であったが、4代将軍徳川綱吉に献茶をして茶道師範の俗称をされたことから、各地各藩の大名は、石州の茶道を受け入れた。

石州の茶は、石州の伝書に見られるように、「数寄に叶ふべき道具」として「1、炭取ふくべ、1、墨跡、1、茶入黒棗、1、茶碗、楽焼、1、花入、竹の筒」（「わびの文」）とし、さらに、「一畳半の伝」では「床は特別に作らず壁床にし、掛け物は紙表具で竹の軸、茶入は棗、茶碗は白高麗か赤楽の割れたものを繕ったもの」と記し、道具立ての中に利休の求めた「侘び茶」の精神を継いでいる。

石州は、桑山宗仙に学んだが、その折り同門であり、かつ家臣でもあった藤林宗源と互いに技を競い合った。宗源は、家臣という立場もあり、石州流茶の湯の完成に大きな役割を果たした。石州は宗源を信頼し、石州の死に際し、茶の湯伝授のことは、宗源に尋ねるように老中に具申したほどであった。

石州の門下に、清水動閑、怡溪宗悦らに加えて松浦鎮信がいたのであるが、石州の死後鎮信らは茶の道を宗源に求めたのである。宗源は、石州流伝書「和泉草」10巻を著わし巻3の巻尾に貞享4年（1687）、松浦鎮信に贈る旨の事を記している。

ここに、松浦鎮信の茶道が確立される歴史が始まるのである。茶の歴史は、千利休が、茶の大成者であることは、大方の認めるところであるが、これ以後、茶の流れは、千少庵からの町人茶と利休七哲と言われる、細川三斎、芝山監物、高山右近、織田有楽、蒲生氏郷、瀬田掃部、牧村兵部ら、大名や武将の茶に分かれていく。

松浦鎮信の茶は、藩主自らが流派の家元であり、その流れが松浦藩主29世鎮信（元和8年～元禄16年（1622年—1703年））より、現在の藩主41世宏月にまで受け継がれている純粹の大名茶は、きわめて稀であるといえよう。なぜなら、茶道のみを専門とした茶家の歴史文化は、茶道にのみ限定されるものであるが、大名茶は、大名文化の歴史と茶道の歴史とが混在することになり、独特の日本文化を形成したのである。

この日本文化の視点より、平戸藩とそれに関わる茶道・鎮信流の理念、系譜を検討していきたい。

(一) 平戸松浦藩主の系譜

(1) 松浦家の系図

始祖・融——第2世・昇——第3世・仕——第4世・充——第5世・綱——第6世・授——第7世・泰——第8世・久——第9世・直——第10世・披——第11世・持——第12世・繫——第13世・湛——第14世・答——第15世・定——第16世・勝——第17世・理——第18世・直——第19世・勝——第20世・芳——第21世・義——第22世・豊久——第23世・弘定——第24世・興信——第25世・隆信——第26世・鎮信——第27世・久信——第28世・隆信——第29世・鎮信

(2) 1世より28世まで

本大学は茶道文化という講義を設定し、茶道を通した日本の礼と茶の中に含まれる和敬清寂の精神を学生に身につけさせようとする講座を持っている。

従って今回は私のつたない研究ノートの中で、特に平戸藩と茶道のかかわりの基本的なものを論述し、更に研究を深めていきたいと思う。

松浦家の系図で明らかなように、松浦家の始祖は従一位左大臣源融公より出る。家紋は三星が本であるが梶葉、二引雨も使っている。この融（トオル）公は嵯峨天皇第十八皇子、仁明天皇の皇弟にして六条鴨河西に方四丁の第宅を構え河原院と称した。

陸奥、千賀の浦曲の勝景に憧れ、日ごと難波三津の浜より海水をはこばせ邸内に塩籠をしつらえ塩やく煙たえず、自ら海士の翁となり、一生を遊樂の数寄に過ごした。やがて大納言、左大臣を拝す。74才で没す。日本史年表でみると垣武天皇—平城天皇—嵯峨天皇—淳和天皇—仁明天皇と続き約800年の初めであり、平安京に都が移り空海が弘法大師の号を受け真言宗を、最澄が天台宗を広めた時期であった。融公は弘仁13年生、寛平7年に没するとあるから、ちょうど西暦822年～896年という期間であり、866年応天門の変、887年藤原基経が関白、824年菅原道真が遣唐大使に任ぜられ、まさに藤原文化の花やかなりし時代である。

1世昇（ノボル）、亜相（アシャウ）は、融・第2子。摂津渡辺に住し、播磨守となり歌道の達人にして世に河原大納言と称す。60才没す。三世仕（ツカフ）、武州（ブシュウ）・四世充（ミツル）、箕田（ミタ）と続き、4代充の第1子・5世綱（ツナ）、渡辺（ワタナベ）・渡辺丹後守は、武勇絶倫にして、鎮守府將軍源頼光に属し四天王随一と称せられた。王生羅生門に於て妖気を払い洛北市原野において子供を殺し、丹州大江山の山賊酒・童子一類の討伐のような武名をひびかせたことが、いろいろの記録に見られる。

6世授（サズク）、奈古屋（ナゴヤ）・7世泰（ヤスシ）、滝口（タキグチ）を経て8世源大夫判官、久（ヒサシ）、松浦（マツラ）は父の譲りを受け、肥前松浦御厨検校となり検非違使になり従五位に叙せられ、肥前国松浦郡彼杵の一部及び壱岐の国を領し松浦郡今福に居を構え、平戸松浦家累代の基礎が定まった。ここに於いて松浦を以て氏とし、今福ある梶谷に居るのを以て梶の葉を家紋と定める。時に康平7年に生まれ、久安4年に没するとあるので1064年～1148年にあたる。ちなみに、1063年源義義、鎌倉に八幡宮を建て、1086年白河上皇、院政を始める。更に1100年以降、平家の台頭があらわれはじめる。9世直（ナホシ）、

御厨（ミクリヤ）・直荘田 750 町歩及び郡之荘外並に彼杵郡、壱岐の地を領し力を上下松浦に用う。10 世披（ヒラク）、峯（ミネ）・峰、鷹島、平戸、宝亀、紐差、大島、伊万里、福島、田平、江迎、佐々、楠泊、屋武、小値賀、黒島、五島、蒲田の網場等を領し、東島を分領。壇ノ浦合戦に水軍を率いて参加。この時代、栄西禅師、宗より茶の実を平戸に持ち帰る。11 世持（タモツ）、照山（テルヤマ）・松浦党の水軍高麗を侵す。この時代、北条氏実権を握る。12 世繫（ツナグ）、平戸（ヒラド）・13 世湛（タタフ）、心性（シンセイ）・14 世答（コトフ）、源五（ゲンゴ）に至る。この時代、松浦水軍を率いて海上に振う。

15 世定（サダム）、肥州（ヒシユウ）は、代 14 世答の長子にして 15 世を襲い平戸城主となる。八郎と称し、人となり勇氣絶倫、世俗においては鬼八郎と呼ばれた。松浦家中興有史のほまれある名主なり。

16 世勝（スグル）、国司（コクシ）この時期松浦党活躍す。『史都平戸』によれば、「松浦党は文永 11 年（1274 年）弘安 4 年（1281 年）の元寇の役には、各々その領内に侵攻を受けたので、各所に力戦奮闘し、殊に水軍による奇襲夜襲によって勇名をうたわれたが、その後ますます水軍に自信を高め、遠く福建・広東付近までも進出し倭寇と呼ばれるようになった。」とある。

17 世理（オサム）、安正（アンセイ）・18 世直（ナホシ）、昌栄（シヤウエイ）・19 世勝（スグル）、正林（シヨウリン）・20 世芳（ヨシ）、春江（シユンコウ）宇久、生月、津吉、下方連合して、白弧山城を囲む大島伯耆守の援到りて城を守るを得たるも勝・芳、両公相次いで戦死す。

21 世義（ヨロシ）、天叟（テンソウ）白弧山城攻めの怨を晴らさんとし、紐差城を陥れ下方の地を併合す。22 世豊久（トヨヒサ）、天翁（テンオウ）・23 世弘定（ヒロサダ）、覚翁（カクオウ）・24 世興信（オキノブ）、高齢（コウレイ）。

又、25 世隆信（タカノブ）、道可（ドウカ）は父の後を受け、肥前守となる。法号を道可と号す。天正 15 年、豊臣秀吉、薩摩を征伐するや秀吉の為に海路を警衛し、又壱岐天草の寇蜂起るや加藤清正と友に是を平定し、父祖の封地を事なく保つを得、第一子鎮信へ譲り、慶長 4 年（1599 年）71 才にて没す。

26 世法印（ハウイン）鎮信（シゲノブ）は、天文 8 年（1539 年）に生る。父の後を襲い、肥前と称す。この時代は足利義昭、織田信長の時代であった。従って、足利・信長に攻められる。また、近隣では竜造寺と闘い、福島を取り返す。外国とはタイ国王との通商を求め、アングリヤ（イギリス）の商船が平戸に入港。スペイン人も来港。大村純忠とも戦うが、以後和を結ぶ。天正 17 年（1589 年）2 月剃髪して、宗静と号し、法印に叙せられ式部郷法印、平戸法印と呼ぶ、稟性豪邁勇武剣法を能くす、足利氏の威は落ち、為に豊後の大友氏に頼り義鎮の鎮の一字を請いて、鎮信と名乗られし。

豊臣秀吉、島津征伐の際は、父道可と共に率先其の命に応じ海上の警備を厳にする。その頃海戦においては松浦家は海内第一名称あり、文禄元年秀吉征韓の挙があがるや鎮信は第一軍小西行長、宗義智と共に釜山に航し先登して、以来、奮戦力間武名をとどろかせる。

在韓 7 年前後 20 あまり代償の先頭に武勲を建て、かの名将李如松の大軍を追い散らせし等、功績偉大であったことを以て秀吉公より感謝状及び衣を賜う。凱旋後寮内外にヤソ教が広まり、風俗乱れることを心配してヤソ教をとりしまった。又織田氏、豊臣氏と結びて尊王の大義を鼓吹し、皇室に忠勤をはげんだ。慶長 19 年 66 才をもって没す。尚、26 世を前の鎮信、29

世を後の鎮信とも呼ぶ。また、鎮信は関ヶ原の戦いにおいては、巧みに戦略をなして、石田三成に味方することなく、後に家康より6万3200石を受ける。

また、公は朝鮮より多くの陶工を従え帰りて、平戸城下に住居せしめ、製陶の技を奨励せしめた。ここに平戸焼創り天下に名声を博した。

平戸焼きは御庭焼として、鎮信流を陰で支えた。平戸藩史考によれば、「文禄の役、肥前守法印松浦鎮信公は韓地に出征し常に偉勲を樹てた。その凱旋するに当たり韓人男女100余名を連れ帰り、今に其の名を留むる平戸の高麗町の地に移住せしめた。その中に能川の陶工巨関頓六及び高麗媼と称する陶工があった。鎮信公は藩内の産業振興とかつ彼らに職業を得せんが為に、窯業の創設を計画し、即ち中野村純漉の土質が朝鮮の土質に似ているというので巨関を藩籍に入れ、今村を名乗らせ中野に陶業を開始せしめた。又、高麗媼も同所に陶業を儲け、里人中里茂右衛門に嫁し、唐津椎の嶺に移り、元和8年其の子茂右門をたずさえて三川内に移住した時に巨関の子今村三元丞も其の子弥兵衛如猿を帯同して三川内に来り別に窯業を開いた。此の両家が三川内焼の元祖である。後世斯界に王位を占め陶器中声価第一とさるるにいたる。中野焼は詳かならざるも慶長年間である。」(出典；平戸藩史考) 結局、巨関は、中野に約25年在し、その作品は色は十分ではなかったが、風雅で味わい深いものであった。

2代目今村三元丞の後、3代目今村弥次兵衛正名(如猿)は、天草石をつかい、より白い三川内を製作し、幕府にも献じ、注文がさばききれず、元禄12年(1699年)には、禁裡の御用となり、如猿は馬廻格として禄百石を与えられた。後、如猿大明神として祀られた。子如猿が弥次兵衛と共に早岐の三川内に移住して、研究、失敗を重ねて、ついに白磁器に藍画染付を完成させ、三川内焼の元祖となったのである。

更に、平戸藩主は27世久信(ヒサノブ) 泰岳(タイガク)、28世隆信(タカノブ) 宗陽(ソウヨウ)と続く。

宗陽は元服し、家康に会っている。その後、慶長10年(1605年)漂着のオランダ船を平戸より送還し、家康の親書をオランダに贈ることからオランダ商館を設置慶長14年(1609年)、又イギリス船平戸に来りイギリス商館を設ける。慶長18年(1613年)これで長崎と共に外国貿易港に指定せられる。また、寛永1年(1624年)鄭成功平戸に生まれる。

一方、三浦按針(ウィリアム・アダム)は、将軍という映画で一躍有名になったが、特に外事顧問として徳川家康の信任を受け、250石を食み三浦の按針様とよばれた。1564年生まれで、数学、天文、航海、造船の事を学んだ。彼は1564年英国エリザベス女王の時代に生まれ、オランダの東洋探検隊の航海長として、按針はリーフデ号に乗り組んで、九州豊後の海岸に着した。慶長5年のこと7ヶ月後に関ヶ原の戦いがある。

家康は彼を重用し、外交顧問となり貿易、測量、造船、兵の装備、強化等の指導にあたった。更に按針に250石を与え、70～80人の家来を召使う身となった。按針の住宅は江戸と逸見と平戸との三ヶ所にあつて、別に浦賀に代理店がある。彼はこの間を往来し、特に平戸イギリス商館長コックスの下に在って東奔西走、或いは自ら商品仕入の為シャム(タイ国)に航するなど多忙であった。また営業を監督し、家康に謁し或いはポルトガル、イスパニアの賓客を応接して外交を処理した。オランダ商館を平戸に設置させたのも、彼の力によるところが大きかった。1620年(元和6年)平戸の地で56才の生涯を終えた。

(二) 松浦鎮信

(1) 鎮信の生い立ち

慶長8年（1603年）家康が將軍となり、同20年、大阪夏の陣により豊臣は滅亡し徳川の時代に入る。徳川幕府が安定した時代、29世の祖、鎮信（シゲノブ）・天祥（テンショウ）より茶道鎮信流は生まれた。

松浦伯爵家編修所刊行の『心月庵と鎮信流茶道』によれば、「松浦鎮信は公諱は重信、後鎮信と改めいつも宗の文天祥の人となり心を心より敬い、自らその居に題して天祥庵と名のつた。又致任の後、圓恵又は徳祐と号す。宗陽の長子、元和8年（1622年）3月13日に、江戸で生まれる。寛永12年従五位下に叙し、肥前守に任ず。14年5月平戸の藩封を襲ぐとあり。是歳天草の匪徒叛きて、有馬氏の故城に據る。11月14日、將軍、親しく公に命じて長崎を譲らしむ。更に長崎の奉行所を守る…」と記されている。（出典；心月庵と鎮信流茶道）これは寛永14年治政の初め天草の乱が起こり、同年11月14日、將軍の命を受け、兵を派して長崎を譲り、日見、茂木の二関と長崎奉行所を護り、その間乱徒の抛る有馬の故城を討ち、15年2月これを陥れるなど軍事にも、その力量を発揮したことによるものである。ちなみに、藩主となったのが、16才の折である。この頃、大徳寺の江月和尚が、平戸に赴く。

更に心月によれば、「和蘭船平戸に來りて交易す。16年、幕府港を長崎に移す、爾來平戸の商売利を失うを以て市外の地錢を減じ、又課役を免す。公夙に心を民政に尽くし専ら利を興し害を除くを以て急務と為す。舊來藩制士祿皆領った采地を以てす。故に或いは壇に農民を役して、力を耕耘に尽すことを得ざらしめ、田地荒蕪に帰するもの多し、公之を憂へ士祿皆之を廩米に取らしめ以て永制と為す。慶安元年大に年有り。米五千石を以て士民に領賜し、河を導きて水溢を防ぐ。其の他田疇を開墾し、民庶をして其の生を遂げしむる者勝げて数ふべからず。又諸所の海岸を築き、民を移して漁業商業を営ましめ及び諸の工業を勸奨す。今の三川内陶工場の如き、実に公の時に生まれり。承応四年、允を得て長崎に七所の砲台を築く。寛文三年三月、暇を請うて西に帰る。伏見に到り長崎火を失い、奉行所も亦災に罹ると聞き、大阪に抵り、之を罹災者に領ち賜ふ。衆皆感泣し、奉行所再造の拳を賛けんことを請ふ。公幕府の許可を得て其の事を督す。七年、幕府の巡国使岡野孫九郎井戸新右衛門、青山善兵衛、平戸に來り按驗ず。三使政令の清廉を聞き、庶民の安寧を見、稱して九州第一の治政と為す。……。」

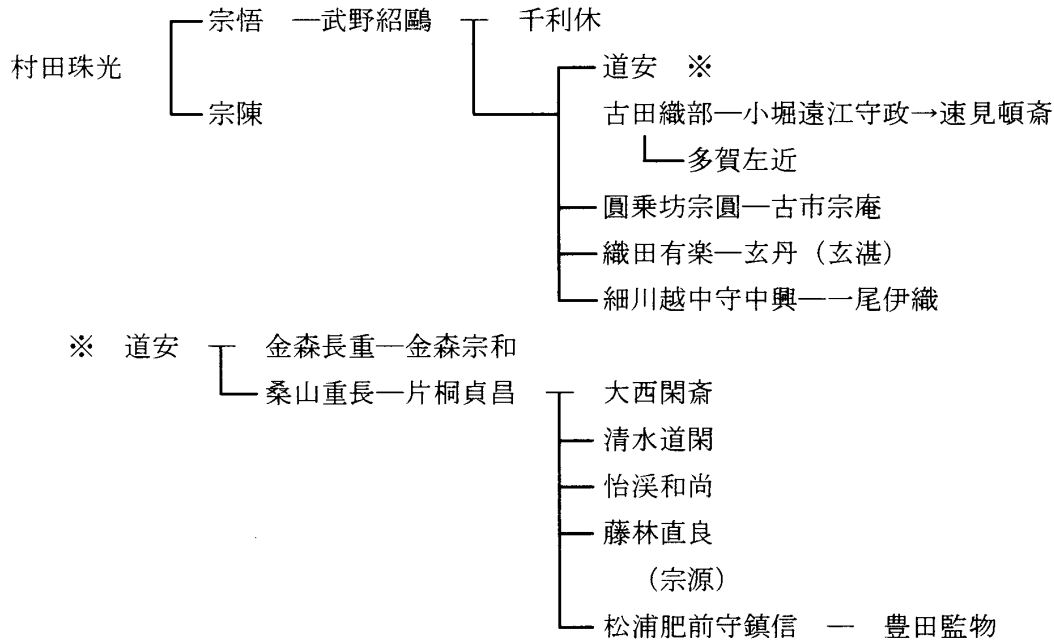
（出典；心月庵と鎮信流茶道）

従來平戸は、慶長14年（1609年）よりオランダ国と交易を開始し、同国の商館を設けるにいたって長く外国貿易の唯一の開港地としておおいに繁榮を誇ったが、寛永16年幕府が長崎の出島に同商館を移転せしめたため、商交の利を失い、封内の經濟は沈滞後退し、何等かの対策を要する事態となった。そこで、重信は27年の長年月にわたり、おおいに力を政治、經濟の振興に注ぎ、市外の地錢を減じ、課役を免じあるいは新田を開きその他、利をおこし、その結果寛永7年（1667年）幕府をして九州第一の政治と賞せしむるまでに復興せしめました。又、寛文8年3月には、小笠原長勝とともに島原城をせめた。まことに整然とした戦いに、まわりの者は感嘆の声を上げたということである。元禄2年（1689年）7月隱退し、8月薙髪して鎮信と改めた。同16年10月6日、82才をもって本所の別邸において歿した。天祥院殿慶巖徳祐と稱し、邸中天祥庵に葬られている。後、松英（篤信）の時、庵を本所中の郷に移し、名付けて天祥寺といい、ここに改葬する。今日の東京・墨田区にある天祥寺は震災、戦災によって被害を受け、きわめてちいさくなりひっそりとした境内には、昔の面影はない。

また、40世素（モトム）祥月（ショウゲツ）によれば、「鎮信は若年のころより文武の道に励み、神書を橘三喜、吉川惟是から伝えられ、天文を秋山忠右衛門、横田才庵に学び、また蘭学に通じ、国典漢籍を文庵、玄覺に受け、禅は隠元、木庵、道者元、沢庵に参じ、法話を盤畦禅師に、易を不破慈庵に聴き書を玄陳に習い、武田氏の兵法を慕い、しばしば山鹿素行を招いて、その学を講習し、その弟平馬を家臣として禄千石を与え、その子高基には女国子をせしめた。外に諸武術の修養勉学に励んだ。」（出典；茶の心）ということであるが、当時は極めて国内平穏であり、武勇を試みる所がなく、三十歳になって武士道精神の修養を風流の内に求め、心胆を茶道によって養なわんと志し、多賀左近、金森宗和の説を聞き、小堀遠州、著書を読み、その門人速見頓斎の伝を受け、織田有楽の茶道の流れを受け継ぐ玄湛の法を聞き、あるいは利休の婿円乗坊の養子古市宗庵の話をも聞いた後、老年になり片桐石見守貞昌について研鑽を積み、ここに茶道の極をおさめることが出来たのである。

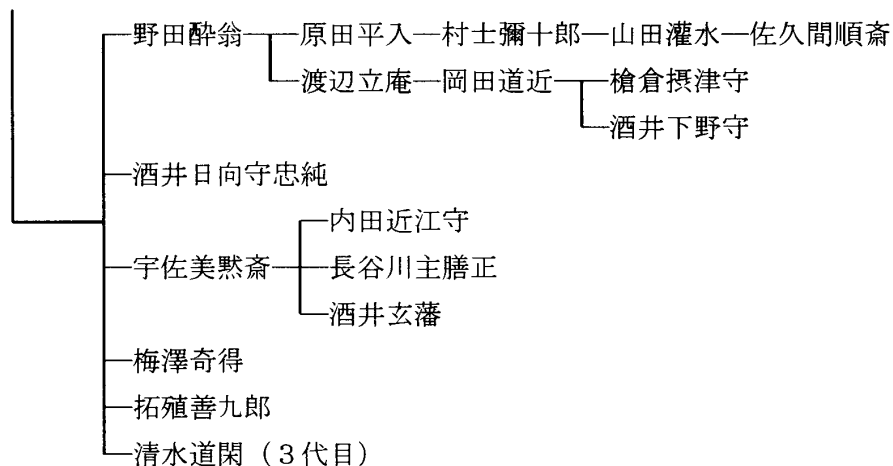
心月によれば、「石州の死後、家臣藤林宗源（通称源之丞）を招き習練を加え、事理を悟り、自ら乾坤を吞却するの機を得たり。且つ細川越州（名は忠興、三斎と号す）の門流一尾伊織と親交があり、其の説を聞き、侍臣橘立佐に其の法を伝習せしめました。更に又三斎の家臣である、利休の婿なる円乗坊の養子古市宗庵より古事どもを尋ね知って、石州を本として、他の諸流を折衷斟酌し、新たに一派を成し之を石州流鎮信派ともいい、又、単に鎮信流と称した。」（出典；心月庵と鎮信流茶道）

鎮信流系図



鎮信流門人伝系

松浦肥前守鎮信



鎮信流抄の第二巻によると、天祥公が茶道を体制するやいなやその流派を慕うものとし多しといえども、公は侯伯の立場にあって一般の宗匠のように簡単に弟子取りで教えることはできなかった。従って、直接にその指南を受くるものは数少なく、多くは代理の代稽古をもってこれを伝える。

村松伊織は、後の豊田監物であるが、天祥公と同じく石州の門人であった。豊田家は公より200石を与えられ、後に国の家老まで進む。その豊田家があらためて天祥公より鎮信の秘奥をさずけられ、後々この豊田家が直接茶道の指導にあたることになった。35世熙（ヒロム）、観中（カンチュウ）がその著書亀岡隨筆に「豊田の家に御流儀をのこして、豊田にまかせた事は、本当に立派なことであった」と書いている。（出典：鎮信流抄第二巻）

豊田監物の子は、小隼人忠知（豊田忠知）といい無関と号し、鎮信流の総師となる。また、鎮信の著書『茶湯由来記』をえらび、その流れをはっきりと明確にした。時に文久3年8月（1863年）である。

(3) 松浦鎮信の茶の心

この鎮信の茶心は著である「茶湯由来記」によるがその中のいくつかを抜き出して、鎮信の目指す茶道理念がある。

イ)「……茶湯の濫觴は、出所おもき事ならねど所作よこしまならずして、そののりただし、理をはなれては一事も調いがたし。ただに所作のみにして、理をもてせざれば、見ものの様になりゆきて、えきなし。元来、茶礼とて礼の一条なれば、礼と楽とをさらず……茶礼にむかいては、恭敬の茶作をもっぱらとして懈慢の邪念を退けぬる有難き道にあらずや。」

茶湯のもともとの源は、決して正確ではないが、茶の所作はいい加減なものではなく法則は正しいものである。理由を離れては、一事も成り立たない。所作のみであれば、見せ物のようになって何の益もない。もともと茶は礼によって成り立つものであつて、また楽しみもなくてはならない。茶礼に対しては、慎み深く敬う心の作法をもち、慢心やみだらな情念を退ける有難い道である。

ロ)「文武は武家の二道にして、茶湯は文武両道の内の風流なり、さらによりて柔弱をきらふ。つよくしてうつくしきをよしとす。」

文武両道の何れにも属する風流が茶道である。それ故に柔弱であつてはならない。美しさの中に、力強さがなくてはならない。

ハ)「細川三斎老人朝かほをいけらし時、「よしさらは散りまでは見し山桜は花の盛をおもかけにして」古織の曰、「何事かおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼるゝ」細川三斎は、「花の盛りは心に抱き、散るまでの花を見ることはしない」

これは、頂点の美しさに思いを到らしめている。又、古田織部が、伊勢神宮に参拝した折りの荘厳なる美しさに、心の底からの感動を示したことを取り上げ、茶道もこの荘厳さを求めいくものであることを唱えている。

むすびに

戦国の武将より発した大名や武将の茶は、もともと敵と戦い、領地を奪い取るという戦いの中より、次第に社会的地位をえたことにより、王朝古典を学び、幅広く諸芸を修得し時代の文化としての素養を身につけようとしたことから生まれたものと言えよう。

和歌数寄、連歌数寄、いわゆる数寄の文字を茶の湯が独占し、数寄といえば茶の湯と答えるまでになるのは、織田、豊臣時代からであるが、徳川時代になり社会が安定期に向かうと、武家は戦う集団から支配する集団と変わっていく。今日で言う政治家であるが、人を治め、支配することは、ただ単に武力によるだけでは限界があり、そこに徳が必要になり、徳と教養を茶道に求めていったのである。

茶道は、一つには禅の教えを取り込み、一碗の茶を点てることは、禅を学ぶことであるという茶禅一味の考えが存在する。いわゆる、心の修業、独座観念の思想に、大名が自らの研磨を求めたのである。

他の一つは、人をもてなす所作が、茶道の求めるところである。利休以前は、茶は身分の低い茶立人によって裏手の別室の茶立所か、廊下の隅で点てられていた。それがいつしか、水屋と称する客室の隣室で茶を点てるようになり、それにつれて炉の位置が、隅炉、向炉、出炉に変わっていった。出炉は、客と亭主が向かい合い、もてなしの心を表現しながら茶を点ていくのである。道具組み、料理、点前等全てに客をもてなす為の所作が考えられてきた。

いわゆる、禅ともてなしの心、この両面より、やがて大名が茶に精神性と実利の効力を求めてきたのである。松浦鎮信は、大名茶の代表的人物といえるのである。

【参考文献】

松浦 素	(1966)	「茶道の心」	国際図書
松浦 素	(1969)	「茶湯由来記」	浪速社
桑田 忠親	(1977)	「茶道の歴史」	東京堂出版
松浦伯爵家編修所	(1930)	「松浦詮伯傳（一）」	松浦伯爵家編修所
		「松浦詮伯傳（二）」	松浦伯爵家編修所
松浦伯爵家編修所	(1939)	「松浦厚伯傳詩文鈔」	松浦伯爵家編修所
松浦史料博物館	(1992)	「史都平戸」	松浦史料博物館
正親町松仙	(1964)	鎮信流抄創刊号	松親会
〃	(1964)	鎮信流抄（一）	松親会
〃	(1964)	鎮信流抄（二）	松親会
松浦伯爵家編修所	(1933)	「心月庵と鎮信流茶道」	松浦伯爵家編修所
歴史読本	(1978)	「武家茶道の系譜」	新人物往来社
三間文五郎	(1981)	「平戸藩史考」	芸文堂